

我が心の宝箱

元ヘッドコーチ 渡辺真介 第10期

大学一年の夏。雨降る夜に、私は京王線明大前の駅の北口近くの「モンクール」というバーの扉を押してカウンターに座った。トリスのストレートが五十円の時代である。

不図見ると、奥のカウンターに一人の紳士が静かにブランデーグラスを傾けていた。隣がラッキースターというダンススタジオだったので、当時流行のジャズが微かに聞こえてくる。物憂い夜の事であった。私はトリスのハイボール。あまりの落差にその紳士が、私にブランデーをすすめてくださった。遠慮する理由は全くない。

話がはずみ出してその紳士が私の住所に近い方と知れた。「いかがですか？」と彼はパイプにブランデーをスプレーしたハーフアンドハーフの葉をつめて点火した香り高いパイプ煙草を奨めてくださる。私は口の中の皮がそっくり一枚剥げる位に吸いまくったのだった。

やがてラグビーの話になり、自分が千歳高出身で「この近くに私の先輩である中山靖由さんという幻のOBがいらっしゃり、毎年夏合宿の寄付をいただきに伺っていて、その都度お母様に何かと面倒を見て戴いているんですよ。」と申し上げたところ、結果としてその紳士がその中山氏ご本人と知るに及び大仰天。

それ以来、中山氏の会社や御自宅に押しかけてはたかりにたかった思い出は強烈である。

中山氏は、公私に亘り御活躍されていらっしゃる事は周知のこと、現在に至るまで目をかけて戴いている。

この事が契機となり、先輩方に色々とお世話になり、自分の技量や精神が向上した分だけそれを後輩達

に受け継いで行く事が己の使命であり義務だと思う様になっていったのである。

汗と涙で汚れ切った顔から哀願する様なまなざしが私に注がれる。「さあ、もう一本行こう」。私は頓着なくホイッスルを吹いた。

午後の陽射しが河川敷きのグラウンドを一面に照らしつけ、ランパスやコンビネーションに走り廻る我々を極限へと追いやって行く。

思えば私が千歳高のラグビー部のOBとして合宿の指導に入ったのは、十八期生達のラグビー部再建の熱い想いを知ったからであった。十八期生といえは私とは八才下の後輩達である。卒業以来、ややもすると部員不足に悩むチームではあったが、十二期柏谷武男、十三期岩本俊彦、菊地一雄、佐々木喜久男、十五期に毛利義之、高木正等を輩出していた。とはいえ、当時の高校ラグビー界に於いては、かつて二度花園の全国大会へ選手を送った名誉あるラグビー部としてはやや精彩を欠いていたようだった。

その時は、私も大学(学習院大学)ラグビーから社会人ラグビー(当時は実業団ラグビーと称していた)へと身を投じ、現役のプレーヤーとして後輩達とは多少隔たりを持っていた。十八期生が一年生として入部してきた時には、上級生部員も少なくなり、遂には廃部かといわれる様だったという。彼等の再建へのパワーが奈辺にあったかは不明ではあるが、意を決した夏合宿が日光で開かれる事について、実業団「東横」の現役である貴島幸一、毛利義之、立大の高木正等々

私を含めてのコーチ陣が千歳ラグビー部再建の為にここに集まったのであった。

私はポジションがフォワードであるが故にラグビーに対する技術をも殆ど持たない。ひたすら前へ出るプレーとバックスへのフォローに終始する。スワーズはおろか、ステップ一つ踏めない。

まだ少年の表情を残す高校生を相手に、闘争心を培い、戦う術を伝える為に絞りに絞った記憶が今になり懐かしく、又ややほろ苦く思い出される。

その彼等が高校を卒業して、三国良樹、湯沢義郎が慶応義塾へ、川辺武己は防衛大学へ、金井義勝は青山学院大へ、鈴木滋男は中央大学(クルミクラブの創立メンバー)へとそれぞれ進学し、何れも第一級の一本目の選手へと成長したことは彼等の活躍と共にこの合宿の効果がささやかに貢献したものと自負出来る。就中平井秀和の如きは、早稲田大学に入学し、(あまり格好の良い入学方法ではなかったと伝聞するが…。目の良さ故の合格だったらしい。)母校チームのコーチに熱を入れ過ぎたあまりに八年かかってようやく卒業した猛者もいたのである。

佐藤俊英は、自衛隊においてもラグビーにマラソンにと活躍した後、独立して会社を経営し、現在に至り千歳ラグビー部誌の発刊に幹事として力を貸してくれている。

私は当時、第一級の社会人ラグビーの雄であった日野自動車に勤務していたので、ことラグビーに関しては会社の理解が深く、全社的な協力体制下において自分自身防衛大での夏合宿、会社のグラウンド近くの

合宿所に於ける秋季合宿等特別休暇の連続であった。従って、束の間の休みに高校の合宿に参加する事等は何でもなく、有給でフル参加出来たのであった。

八ヶ岳を遠く望む富士見高原での合宿は、二十期生を中心とした上昇中のチーム作りが求められた。十九期不在のこのチームは、二十期生が二年間の最下級生を経験し、漸く三年生として活動の出来る合宿なのであった。

この合宿にも五期生以下明治生命の赤根惇氏(九期)、東急百貨店の名スタンドオフ貴島幸一(十期)、伊勢丹の中村武治(十一期)等そうそうたるコーチ団を組み上げる事が出来た。

毎日のミーティングでは、熱烈なディスカッションが行われ、ヘッドコーチとしての私は一身をチーム作りに掲げる覚悟でこの合宿に臨んだ。

狭いグラウンドを早大のダンス部に占領され、やむなく地元の高校のグラウンドを強談判の上借用し、練習を始めたところ、たまたま以前コーチをした事のある日本学園高のOB芹川氏、春日氏に請われ、一緒に練習することになった。

しかし、練習メニューの内容に大きな隔たりがあり、我々の練習の在り方に目を見張った芹川、春日両氏は勿々に撤退された事が鮮やかに記憶に残っている。ヤマの日には、ランパストップ十往復程度、ドンドン五分程度を五回位のメニュー。選手は私に殴りかからんばかりの形相で、辛い練習に食いついてきてくれたものである。

卒業後、川口隆吉は東京外大へ、加納真人は水

産大、斎藤栄作は東海大等それぞれ一級の逸材として大学ラグビー界へ翔いていったのであった。

前にも触れた様に、私のコーチングは実に単純な方法しか持たない。一貫して左右にボールを振り、モール・ラックを奪取しさえすれば、必ず得点に結び付く。ディフェンスに於いては、タックルとセービングをきっちりこなし、それを攻撃へ結び付ける。

私の下級生達は、それらのプレーの確立に体を張ってこなししてくれたのであった。コーチングスタッフも細部に亘って私のテーマを現実のプレーに反映して選手達の指導にあたってくれたのである。

秋季全国大会の日大二高とのゲームは、敗れたりとはいえ、富士見合宿の成果が見事に花咲いたものと確信している。正にコーチ冥利に尽きるシーズンだった。

宇都宮での二年続けて行われた夏合宿も私の心に残る印象的でつややかな思い出の一つである。県営の総合グラウンドを借用しての練習は、やや少なくなりつつあった部員達には、かなりハードな合宿であっただろうと思う。OB連は練習マッチの相手が出来るくらいに多数集まり、現役一人一人にマンツーマンでコーチできる様ですらあった。二十三期生が最高学年であり、小粒ながらまとまりのあるチーム作りが出来た合宿だった。それぞれが個性的なキャラクターの持ち主で、行き帰りのバスの中で歌を唱わせたり、バスガールをからかったりと終始笑い声の絶えない合宿だったと記憶している。

後に佐々木晋之、佐藤茂は明治大学へ、中込守

は慶応義塾、八代義一は横浜市立大、高木晴生は成蹊大へ等々やはり大学ラグビーの下支えの役をきっちり果たしてくれた姿が懐かしく思い出される。

主将の佐々木晋之は、全東京チームの主将にも選出され、岩手遠征を果たした後、明治大学では一年からレギュラーとして活躍した。故北島監督の甥でもあり高校時代は北島宅に下宿して千歳高校に進学したラグビーの虫であった。

私と同期の仲間達、そして先輩の方々、そして後輩の連中。何かにつけて今に至るまで親しくさせて頂いている。最初は荒々しかった先輩達が、今は丸く穏やかである。まさに社会の荒波に研磨された宝石そのものである。

後輩達も、それぞれ立派な社会人として見事に光を放っている宝石達である。

そして今は現世に別れを告げ、天界から私を見守っていてくれる先輩や同期生、後輩が形こそ異なれ輝く星々として私の心の中の燦然と輝いている宝石である。

こうして私の心の中の宝石箱は、思い出す度にまなこに現われ、回りの舞台の暗転から抜け出た夢のごとくに鮮やかな光彩を放ち続けている。

忘れようとして忘れ得ないこの私の宝石箱は、終生心の中でその光芒を保ち続けるであろうし、千歳ラグビー部が永遠であるように、大切にして行きたいものと心から望んで止まない昨今である。